

## E スコット・フィッツジェラルド 『グレート・ギャツビー』におけるケアと主人公 —— 傷からのつながり

井出達郎

### はじめに

E スコット・フィッツジェラルドの『グレート・ギャツビー』は、主人公が誰なのかをめぐる議論が今なお続いている作品である。タイトルにもなっているジェイ・ギャツビーが主人公なのか、それともギャツビーについての物語を一人称で語るニック・キャラウェイが主人公なのか、これまで様々な解釈がなされてきた。しかしこの主人公をめぐる議論は、その問題設定それ自体にひとつの問題を孕んでいる。タイトルを「ギャツビー」としつつその物語を別の人物が語るという構造は、確かに主人公をめぐる議論を引き起こすものになっている。だがそれならなおさら、なぜ作者のフィッツジェラルドはあえてそうした構造を採用したのか。従来の議論は、「どちらが主人公なのか」という問題に関心を向けすぎるあまり、そもそもなぜフィッツジェラルドは主人公が曖昧になる書き方をしたのかという問題をなおざりにしてきた。

本講義は、『グレート・ギャツビー』において主人公が曖昧なのは、ギャツビーとニックの間にある「ケア」と呼ぶべきつながりを描くために必然的に要請される書き方であった、という解釈を提示する。二人のケアというつながりは、「傷つきやすさ (vulnerability)」という性格からはじまり、「身

E.スコット・フィッツジェラルド『グレート・ギャツビー』におけるケアと主人公「代わり」という中心的なモチーフと絡み合うことで、自己と他者との境界を攪乱させる出来事を現出させる。そしてその傷からのつながりは、この作品をめぐってしばしば指摘される、アメリカのセルフメイド・マンという考えの問い直しとなっている。

### 1. ケアという問い——「傷つきやすさ (vulnerability)」をめぐって

作品におけるケアという主題は、語り手ニックによって提示される。ニックは、語り手の対象であるギャツビーに対する自分の立ち位置を、「気がつけばただ一人ギャツビーの側にいた」(172) といっって特権化する一方で、ギャツビーの死の原因となりながら立ち去ったようにしか思えないトムとデイジーを「彼らは不注意な人々 (careless people)」という言い方で非難する。ここで言外に明らかなのは、デイジーやトムを三人称の「彼ら」と呼ぶことで自分との違いを強調しながら、ニックは自ら特権化した自身の立ち位置を「ケアをする人」と位置づけていることである。事実、時には自分とのあまりの違いに圧倒され、時にはその行き過ぎた行動をたしなめながら、最後までギャツビーに特別な「関心」をよせ、「世話」をし、「気遣い」をみせつづけるニックの性格は、“care-away (離れつつも、ケアをする)” という音として、“Carraway” という名からも聴きとることができる。

ニックのギャツビーに対する「ケア」は、ニックがギャツビーに見出す「傷つきやすさ (vulnerability)」からはじまる。冒頭ニックは、「私がまだ若く、もっと傷つきやすかったころ父は僕にある助言をしてくれた。それ以来私は、その助言を何度も心の中で思い返している (In my younger and more vulnerable years my father gave me some advice that I've been turning over in my mind ever since)」(1) と述べながら、あたかも自分が「傷つき

E.スコット・フィッツジェラルド『グレート・ギャツビー』におけるケアと主人公

やすさ」を克服したかのような宣言で物語を始める。この宣言で言われる「傷つきやすさ」は、その後の物語で現れるゴシップに対する明確な弁明というモチーフを通して、自分で自分自身の批判にたいして「ケア」をできるという状態として提示されていると解釈できる。その状態は、ニックのフロンティア精神の表明とも関連しつつ、自分で自分自身をケアできるという自己完結的なセルフメイド・マンの在り方とも結びつけられていく。

他方ギャツビーは、自身のゴシップに対して明確な弁明ができないという点、人からの批判の対象に容易になる点において、ニックの示す、セルフメイド・マンのためには克服すべきはずの傷つきやすさを曝し続けていく。だが、まさにその傷つきやすさから、ニックのギャツビーへのケアは始まる。周囲の人々と同じくギャツビーにうさん臭さを感じていたニックは、ギャツビーが自身の出自についての告白をするとき、あからさまな嘘を含んだギャツビーの拙さゆえに、かえって彼に対する独特な関心を寄せ始める。自分で自分自身のケアをすることができないというセルフメイド・マンとは反対のあり方にこそ、ニックはギャツビーに惹かれていく。

## 2. 「開かれ」としての「傷」

ニックのギャツビーに対するケアのはじまり方は、傷つきやすさが自己完結的なセルフメイド・マンのあり方を切り開き、他者に対する「開かれ」という出来事を誘発することを示している。「傷つきやすさ(vulnerability)」について論じているエリン・C・ギルマンは、オックスフォード英語辞典の定義に使われている“open”という表現を用いながら、傷つきやすさが自分の意のままにならない仕方で影響を受け、また影響を及ぼすという状態に「開かれ」ていることを論じている。一方では自分で自分自身をケアできるセルフメイド・マンとしてふるまうニックは、他方では傷つきやす

E.スコット・フィッツジェラルド『グレート・ギャツビー』におけるケアと主人公さを通して、まさにこの意味においてギャツビーに対して「開かれ」ている。この傷の「開かれ」は、「ニック」という名前がもつ「切り傷 (nick)」という意味と強く共鳴している。ジル・ドゥルーズは、晩年のフィッツジェラルドのエッセイ「崩壊 (Crack-up)」についての論考の中で、タイトルになっている「裂け目」というモチーフが、「外と内に到来する者と、衝突・交差の複雑な関係、リズムの異なる二つの間歇的合流の複雑な関係」(ドゥーズ 269)を持つものであると述べている。この外と内の特異な関係は、ニックの「うちでもあり、外でもあった (within and without)」というセリフとともに、自己と他者の境界が曖昧になる「切り傷」としてのニック自身に正確に当てはまる。

### 3. ケアという主人公を曖昧にするつながり — 身代わりのモチーフ再考

傷とは裂け目であり、その傷からはじまるケアが自己と他者の境界を曖昧にしていくことは、何よりも物語の核となる「身代わり」のモチーフとして反復されている。まずギャツビーはデイジーが引き起こした死亡事故の「身代わり」として殺されることになるのだが、ギャツビーが犯人として殺された後、すなわち、文字通り周りからの批判に対して全くの無力になった後、ニックはギャツビーに対する噂話や憶測に対し、自分だけが答える責任があるという思いを持ち始める。そもそもギャツビーの物語全体がすべて終わった時点からはじまっていることを考えれば、弁明することができない存在に対するこの責任感は、ギャツビーについての語り全体に及んでいるといってよい。その意味で、表向きは一人称で語られるこの物語は、それが丸ごと身代わりの物語になっている。

一人称によって他者を語るというこの構造は、ケアという主題、自己と他者との境界が曖昧になるという主題とそのまま重なり合っている。それ

E.スコット・フィッツジェラルド『グレート・ギャツビー』におけるケアと主人公

が最も端的にみられるのは、作中に現れる一人称と三人称が混ざった語りである。野間正二は、ギャツビーが自動車事故の後にデイジーからの電話を待っている場面をニックが想像する箇所において、ニックの語りが「僕は思うのだが」という一人称を用いた断りではじまりながら、それが「ちがいない」という断定に近いかたちに変化し、最後には一人称の視点では知りえないことまでも描写していく、という特異な語りのあり方を指摘している。この語りの特異性は、一人称と三人称の境界が極めて曖昧になっているという意味において、「傷」という意味を名前に含む持つニックが体現する、傷からのつながりのあり方そのものの実践となっている。

### お わ り に

このように作品は、「ギャツビーとニックのどちらが主人公なのか」という問いではなく、「なぜ主人公がどちらかが曖昧なのか」という問いから読むことによって、ケアと呼ぶべきつながりという主題を現出させる。そのとき、主人公が曖昧であると言われてきた物語は、セルフメイド・マンになるためには克服しなければならない傷つきやすさ（vulnerability）からはじまり、身代わりというモチーフに結実する、自己と他者の境界がどこまでも揺らいでいくケアの物語として読み直すことができる。

※本講義は『東北アメリカ文学研究』第40号収録の拙論「ケアのはじまりとしての傷つきやすさ——E.スコット・フィッツジェラルド『グレート・ギャツビー』における傷からのつながり」を、連続講義「主人公から読む英米文学」のテーマに合わせて修正したものである。

## 引用文献

Fitzgerald, Scott. *The Great Gatsby*. 1925. New York : Scribner. 1995.

Gilson, Erinn C. *The Ethics of Vulnerability : A Feminist Analysis of Social Life and Practice*. New York : Routledge, 2014.

ジル・ドゥルーズ 『意味の論理学（上）』1969年，小泉義之訳，河出書房新社，2007年。

野間正二 『グレート・ギャツビーの読み方』創元社，2008年。